

2006. 1. 1

月刊通信

はなしがい

第234号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田 2-1 5-6-5 1 5

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Web ページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

パスカルが「人間は考える葦である」と人間を葦にたとえたことに今さらながらなるほどと思います。フロム『悪について』（1965 紀伊国屋書店）も人間の弱さや危うさを基礎に人間の善悪を考えています。

フロムはフロイトの理論の継承者です。フロイトは人間の心理を神などの絶対者からではなく、人間自身から解き明かそうとしました。そして、人間の根底にある性のエネルギーを基礎としたリビドー理論を立てました。ギリシヤ神話にもとづくエディプス・コンプレックスの考えはよく知られています。男の子が父親を敵にして母親を奪うと話です。

フロムはフロイトのリビドー理論を批判して、男女に共通する、より根源的な人間の傾向をとらえました。これまで二回、紹介してきた三つの傾向です。それは社会における人間の行動まで説明できるものです。第一が「死の愛好」、第二が「ナルチシズム」、第三が「近親相姦的共生」です。今回は第三の問題をとりあげます。

フロイトがエディプス・コンプレックスを男の子の幼児期に生じると考えたのに対して、フロムは男

女にかかわらず「母親への愛着」が強いものだと考えます。それは性のエネルギーとはまったく別物だということです。根本は自分を守りたいという本能です。自己に責任を持つことや、自由になることや、自己を意識する負担から逃れたいという願望です。これらすべてを「無条件の愛」として「母親」によって充たされたいと願うのです。

このような願望は子どもだけではなく、大人も抱いているものです。人生の危険と負担から逃れるために、「確実性と防衛と愛情を与えてくれる力」を求めています。それが「母なるもの」です。つまり、人間は二つの傾向の間で板ばさみに生きているのです。象徴的にいうなら、明るいと暗いところに出ようとする傾向と子宮の暗闇へ退行しようとする傾向との間、つまり、冒険を求めるか確実性を求めるか、負担を背負って独立を求めるか保護や依存を求めるかという選択にさらされます。そして、社会においては、民族、国民、宗教、政党などが「母親」に代わる「保護と愛情の保証人」として控えています。

●「母なるもの」への依存心

「母親なるものへの依存心」には良性と悪性があります。良性ならば、たいていの男性につきものです。自分を慰め、愛してくれる女性、あるいは保護し、養い、世話をしてくれる女性を求めます。それがすすむと、母によく似た人を妻に選んで、この女性を絶えずおそれつつ、なお無意識的に反逆するものの罪悪感に襲われるようになります。

最も悪性の依存心をフロムは「近親相姦的共生」と呼びます。それは「その人なくしては生きていけない」とか、「極度に不安を感じたり脅えたりする」ような段階です。この精神構造は個人的に母親へ固着するだけではありません。家族や国家や民族にも依存するのです。それは人間の理性と対立します。この問題点は現代日本の社会現象にも見られます。

「もし私が（へその緒）を切断することに失敗し、そして確実性と保護の偶像を強く崇拜しようとすれば、その偶像是神聖なものとなってくる。」

第一の欠点は、理性的な判断を狂わせることです。「固着の対象が母親ではなくて、家族や国家や民族

である場合には、はるかにアイマイになってくる。

これらの固着は美德と考えられているから、強力な民族的または宗教的な固着からは、偏見や歪曲を伴った判断が生じやすい。」

第二の欠点は、「他人を体験することがない」ことによる心の狭さです。「母なるもの」に固着している人は、「同じ血や土を共有する人々」だけしか仲間と感じられないので、同族以外の（他者）を人間として承認できないのです。

第三の欠点は、「自分自身であること、自己の信念を持つこと」がなくなってしまうことです。「私の生活は母のおかげである」と思うのと同じように、「人間すべて国家に忠節を尽くす義務がある」と考えて、自らをあずけてしまうのです。

以上のことをフロムは次のようにまとめます。

「母なる人やそれと等価値のもの——血縁や家族や種族——に結合したいという傾斜は、すべての男女に内在している。それは反対の傾斜——誕生し、前進し、生長する傾斜と絶えず葛藤する。正常な発育の場合には、生長の傾向が勝利を得る。」

以上の「近親相姦的願望」は人間に内在する最も基本的な性向の一つです。「自分の出所と縁を切りたくない」と思い、「自由」を恐れ、自らの無力さを恐れ、自らが破壊されないかとおびえています。それでは、わたしたちはどのような生き方を目指すべきでしょうか。

●独立と自由への道

三回にわたって述べた三つの傾向——①ネクロフィリア（死の愛好）、②ナルチズム（自己愛）、③近親相姦的固着——のいずれかをたいていの人が持ちます。三つともそろった人はほとんどいませんが、そろえば悪性の傾向は一つにまとまります。ひたすらナルチズムに浸って、生き生きしたものを恐れ、暗闇に向かおうとし、死と破壊を望むのです。

それに対置される三つの生き方があります。第一に「生の愛好（バイオフィリア）」、第二に「隣人と異邦人への愛」、第三に「独立と自由」です。

第一の「生の愛好」からわたしが連想するのは梶井基次郎の作品の生命感です。第二のナルチズム

の克服は次のことばに代表されます。「我々は異邦人のうちに人間を発見する。異邦人に対する愛においては、ナルチスティックな愛は消滅する。」（ヘルマン・コエエン）聖書の「汝自身のごとく汝の隣人を愛せ」（旧約）、「汝の敵を愛せよ」（新約）もも重なります。第三の「独立と自由」とは、人間の原初的な「母なるもの」への愛を基礎としてより広い愛につながるものです。「人間は自己を、自らの過去および未来を、すなわち自らの弱小、無力に気づいている」から、「分離感に打ち勝って、結合感、合一感、所属感を獲得し」なければならぬのです。そして、フロムは二つの道を示します。一つは〈退行的〉解決の道です。人間の原初的な状態への退行、人間らしき物を除去して過去へと退くことです。社会全体がそうなると、〈大衆の愚行〉が生じる危険があります。もう一つは〈前進的〉解決の道です。人間的な力、その内なるヒューマニティを完全に発展させ、新しい調和を発見する道です。「迷ったときには積極的な方を取れ」——このことばは、わたしが人生を前向きに生きるための教訓です。

2006. 2. 1

月刊通信

はなしがいい

第235号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田 2-1 5-6-5 1 5

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Web ページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

今年の四月から、ある大学で文章の基本を教えることになりました。ただ単に文章の書き方ではなく、基礎教養として「話し・書き」「読み・聞き」の全般にわたる講義内容になるでしょう。

近ごろは、どの大学でも学生の学力低下が問題のようです。先日、テレビを見ていたら、ある大学の「学習支援センター」というものを紹介していました。学力不足で授業について行けなくなって退学する学生のための救済対策でした。わたしの担当する講座も同様のものです。

子どもたちの学力低下が話題になったのは、十数年前です。ちょうど同じころ、大学においても、入学して二年間の教養課程がなくなりました。一時は、教養課程の必要性について議論がありました。が、現実には押し切られました。それが今になって裏目に出て、もともと基本的なスピーチや文章の能力が求められるようになったのです。

コトバの能力というと、コミュニケーション能力と思われがちです。しかし、伝えるべき考えが問題です。伝える者に考えがなければ伝えようがありません。

せん。また、考えの組み立てかたも問題です。考えは、話しても文章でも文章のかたちをとります。コミュニケーションの能力をひとことと言うなら、文章を正しく書き、正しく読む力です。それで十分です。ただし、コトバを媒介にして人と人とがどう交流するのか、人間同士の理解は可能なのかという哲学的な根本問題は残ります。

●内田樹さんの著作

最近、内田樹著『ためらいの倫理学』（2003年 川文庫）を読んで、人と人とのコミュニケーションの原理について考えました。内田さんの専門はフランス現代思想です。「現代思想のセントバーナード犬」と自称しています。難解な現代思想の「深い森」に迷い込んで「遭難」した人たちのために、雪山を走り回って、鼻先をなめたり、ブランデーを含ませて励ますということを意味します。

たしかにそのとおりで、二十年ほど前に、日本で大流行した「構造主義」という哲学について、わかりやすく解説したおもしろい本も書いています。

わたしが感心したのは「越境・他者・言語」という論文です。内田さんは全世界の人びとがお互いに理解し合って平和に生きられる社会を展望しています。現代社会の大きな障害として、「同一性への固着」や「他者に対するアレルギー」を問題にしています。人びとには、似たもの同士や仲間同士では仲がよいのに「他者」に対して冷酷になる傾向があります。

「他者」。それは原理的に私たちの統制や支配が及ばず、私たちの理解や共感を絶しているものである。」

わたしたちが他の人びとを「他者」として見るとき、どんなことが生じるでしょうか。また、どのような態度をとればよいのでしょうか。政治の世界では、ナショナリズムによって自国の利益を守ろうとする大国主義や、宗教を盾にした暴力的な潮流があります。そこには、人間同士の理解という深い問題があるのですが、それを安易に通過してしまったことを嘆いています。

「『無垢にして純粋な起源への帰還』、『エスニッ

クな本質の従前なる発現』という同一の話型をなぞった政治的神話が「他者アレルギー」に駆動されて、今地球上に蔓延している。そのことの責任の一端は、「他者」という思想的な難問を最低の鞍部で乗り越えた私たちの時代の知的な怠惰にあると私は思っている。」

これを打ち破る原理として内田さんがほれこんで紹介しているのは、哲学者エマニュエル・レヴィナス(1906-1995)の考えです。この人はリトアニア生まれのユダヤ系フランス人で、倫理哲学の専門家です。その考えの基礎には、聖書の「隣人愛」に通じる「愛」の考えがあります。

●「他者」を通じた主体の確立

内田さんは、わたしたちと「他者」との出会いについて、聖書の物語のようなたとえ話で語っています。わたしたちが異質な人たちと出会ったときに、どのようなことが起こるか、その精神的な葛藤について書かれています。

「他者は『我が家』に混乱と不和と紛争と確執を引

き起こす。他者との出会いとは、「我が家」という安定的な知解のシステムが解体し、私が絶対的な「単独者」として孤立するような経験である。

というのも、到来した者の言葉は、私の理解や共感を超えているにもかかわらず、その理解できない言葉を、私はそれでもなお一個の「主体」として引き受け、聴き取らなければならないからである。この背理的な責任の引き受けを通じて、はじめて「主体」は成立する。」

思想における「主体」の成立は、コトバを通じて行われます。これは、他人に向けてコトバを発するものにとつても、他人のコトバを聴きとる者にとつても重要なことです。

「私」の知見と「私」の感覚に激しく抵抗するものを「私の言葉」で引き受けることができるまでに、「私」の言語的な容量を拡大してゆくこと。「私」のものではない文法と「私」のものではない語彙を用いて、なお「私の言葉」を語りうること。そのような言語の練磨を通じて間断なく「私」を立て、突き崩し、破壊し、創造すること。」

内田さんは、これを言葉による「越境」と呼びます。人のコトバを理解したり、その人の考えを理解することは、自分の立場に立てこもっていてできることではありません。いったんは、自分が他人から孤立するような状況が起こることがあります。そのときに役に立つのがコトバです。人のコトバを理解するためには、相手の考えを自分のコトバに置き換えざるを得ません。そのとき、自分がそれまで使っていたコトバの規模が広げられたり、自分の使うコトバの意味が深められるのです。

このような作業は、一度、行えばいいものでもなし、一夜にして成り立つものでもありません。毎日毎日、自分の責務を果たすようなものです。内田さんはそれを「コミュニケーションの修行」だといいます。まさに、「コトバは一生かかって磨くもの(大久保忠利)」だということです。

人と人とのコミュニケーションとは、お互いが「他者」として向き合い、せめぎ合いつつ行われる理解です。それを実現するためにも「読み・書き、話し・聞き」というコトバの能力が大切なのです。

2006. 3. 1

月刊通信

はなしがいい

第236号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

現行の学習指導要領の目玉商品であった「ゆとり教育」が、とうとう廃止になります。そのきっかけは、二〇〇四年に、国際的な学力試験の結果が公表されて、日本の子どもたちの基礎的な学力の低下が明確になったことです。それで、削減されていた授業時間が増加されることになりました。

「ゆとり教育」の導入は二〇〇二年でした。ところが、その後、子どもたちの「学力低下」が問題になりました。その対策として「百マス計算」で知られる「陰山メソッド」が大流行しました。今では、オトナたちの老化防止の訓練にもなっています。

●「読解力」とは何か？

子どもたちの「読解力低下」の根拠については、石原千秋『国語教科書の思想』（2005ちくま新書563）に詳しく書かれています。

「ゆとり教育」の見なおしのきっかけは、二〇〇四年十二月に報道された「生徒の国際学習到達度調査（PIISA）」でした。これは経済協力開発機構（OECD）が、世界四十一カ国の十五歳の子どもた

ちの学習到達度を調査したものです。日本の十五歳の子どもたちの「読解力」は前回二〇〇〇年の世界八位から十四位に低下しました。

それで、文部科学省では、「ゆとり教育」からの転換を打ち出したのです。その最初の政策が、授業時間の増加です。しかし、ただ時間を増やせばいいというわけではありません。

石原氏は「PIISAの「読解力」試験が求めているのは、端的に言えば批評精神なのだ」と言います。「読解力」というと、近ごろでは情報を読みとる力というような考えがあります。しかし、日本の子どもたちは文章や図から情報を読みとるような能力はそう劣ってはいません。むしろ、トップレベルなのです。それよりも、問題は「論述能力」が低下したことだと言うのです。

コトバの能力というならば、「情報」を読みとる力とは、いわば単語レベルでの情報の取り出しです。文章や図から文字や単語を拾い出すことです。日本の子どもたちは、「それは何か」というような設問については応えられるのですが、「それはなぜ

か」と問われて、「考え」に理由や根拠をつけて論理的に述べる力がありません。

石原氏の言う「批評精神」と言うのは、設問に対して「考え」を「論述」する能力です。「考え」を文章のかたちで表現することは必ず「批評」になるのです。日本の子どもたちの「批評精神」の貧しさとは、「文章能力」の貧しさといってもよいのです。

学力調査の設問の中でとくにできなかったのが、対立する意見のそれぞれについて理由や論拠を述べる問題でした。日本の教育では「考え」を論理的に分析することなどありません。まして、対立する二つの立場に立つて理由や論拠を考える経験もないでしょうから、しかたありません。さらに、物語の終わり方が適切かどうか判断して、その理由を述べるという問題はもつともできないものでした。これは論理だけではなく、作品全体の構成についての総合的な判断力を必要とするからです。

●「読解力」の教育とは？

どなたも経験があることでしよう。日本の国語教

育では、与えられた文章を「ありがたいもの」として、受身の立場で「解釈」することだけが行われています。教科書を批評的に読みながら授業をするような先生はほとんどいないでしょう。読解といったら必ず、「作者の言いたいことは何か」とか、「作者の意図は何か」という目標が設定されます。

しかし、「読解」とは、読み手が受け身になって書き手の意図を探ることではありません。読み手は文章と直接向き合うのです。そして、書かれた文章をなぞりながら、そこに自分の考えを重ねていくのです。白紙に文字がプリントされるように、読み手の頭に文字情報が写されるわけではありません。

「読解」の作業には二つのレベルがあります。

第一に、文章それ自体の表現を正確に読みとることです。文章は書き手から独立したものです。文章をよく読まずに書き手の意図ばかり探っても仕方ありません。

第二に、書き手の意図と文章との対比です。文章を読むうちに書き手の意図も見えてきます。しかし、それと文章との間には必ずズレがあります。表現で

きたことと、表現しきれなかったことがあります。この二つが区別できれば、文章が正確に読めるのです。

つまり、文章を手がかりに、書き手の考えと自分の考えとを比較し、検討することが、何よりも大切なのです。いわば、「読解力」とは、書き手の文章から読みとれる「考え」を、自分の文章のかたちに組み立て直す力なのです。ですから、読解力は「論述能力」となるのです。

●「国語科」と言語論理教育

石原氏は「国語科」から「文学科」を独立させることを提案しています。わたしも賛成です。現行の「国語科」は、日本語の言語能力を養成するための科目として充実させるべきです。とくに重要なのは「言語論理能力」です。石原氏の言うとおり、現行の「国語科」の教育は半ば道徳教育です。その理由の一つは、文章が正確に読まれずに、書き手の意図を読もうとするからです。

わたしたちは日ごろコトバを使って、ものごとを

考えたり、考えを伝えたりしています。しかし、あらためてコトバについて考えることはありません。

「考え」そのものと文や文章のかたちとの関係など、ほとんど意識しません。しかし、「考え」は文や文章のかたちで表現されるものです。「文」や「文章」というかたちがなければ成り立ちません。イメージを「文章」にすることで「考え」はすすむものです。その基礎となるのが「論理」です。

人びとがよく口にするのは、「国語の力はすべての学科の基礎だから重要だ」ということです。しかし、現行の「国語科」の内容では、すべての学科の基礎にはなりません。重要なのは、言語の論理的なほたらきです。文学の基礎にも論理があるのです。ですから、現行の「国語科」の内容は「言語科」として充実させ、そこから独立させた「文学科」で、本来の文学の教育をすればよいでしょう。

今後、増加した国語科の授業で、言語を使って論理的にものを考えたり、表現する能力の養成を重視するならば、子どもたちの基礎学力はまちがいに向上することでしょう。

2006. 4. 1

月刊通信

はなしがい

第237号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田 2-1 5-6-5 1 5

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Web ページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

現代教育の一つのテーマに「マルチメディア」の問題があります。「マルチ」とは「多数の」、「メディア」とは「媒体」という意味です。

わたしが小学生のころには、「視聴覚教育」ということばがありました。これもある意味でマルチメディアだったでしょう。しかし、何ということはないもので、テレビの教育番組を見せたり、ドキュメンタリー映画を見にくというものでした。

現代の「マルチメディア」による教育として一般に行われているのは、パソコンの操作の仕方を教えたり、インターネットで情報を検索するといったものです。わたしには、それ以上のイメージがありませんでした。

●マルチメディアの時代

西垣通『マルチメディア』（1994岩波新書）は、わたしの疑問に根本的な答えを与えてくれる本でした。十年以上前の本ですが、技術的な記述が古びただけ、問題の本質がよく見えます。要するに、一九八〇年代に登場したパソコンの技術の進歩によ

て、さまざまなメディアの情報を統一的に処理できるようになったということです。ただ単に、文字、音声、画像、映像という要素が総合されるということならば、すでに本や雑誌やテレビなどで一部は実現していました。

問題は、文字、音声、画像といったデータをデジタル化して、すべて共通にコンピュータで処理できることです。簡単に言うと、文字から映像まですべてを0か1かの数字の組み合わせに置き換えて処理するのです。コンピュータが「電子計算機」と呼ばれるゆえんです。テレビ放送のデジタル化もこの流れにあります。どうやら「マルチメディア」というコトバは、パソコンとインターネットの普及によるビジネスチャンスについて語られているようです。

●教育とマルチメディア

教育は人間の問題です。人間のあらゆる知識や技術は現実と向き合って、何か感じたり、何か考えたりすることから生まれます。そのために、さまざまな道具や機械を使います。マルチメディアも、いわ

ばひとつの道具です。

西垣氏はコンピュータはマルチメディアを実現する機械だと言い切ったうえで次のように言います。

「『感性から理性へ』などと騒ぐかわりに、『マルチメディアによって、いかなる感性情報の（論理的な）編集が可能となるか』と問いかける方がましである。」

人間だけしか使えない道具は言語です。言語の使用によって人間は他の生物と区別されます。

「言語は感性情報を編集し統合する。このはたらかしは少なくともヒトがヒトであるかぎり変わらないだろう。だが、ここ数百年、ヒトはあまりに論理的な文字言語ばかりに頼ってきた。そこでいま、マルチメディアが新しい（ロゴス）となれるかどうか、われわれの前に突きつけられているのである。」

マルチメディアで処理されるものは、すべてデータです。これらのデータは記号として人間に働きかけるものです。人間の考えを記号という乗り物に乗せてやりとりをすることで、人間と人間との交流をはかるのです。人間と人間との関係を抜きに、ただ

文字や画像がやりとりされるわけではありません。文字や画像には意味があります。送る側も受ける側も、情報とともに意味のやりとりをしているのです。

それらの記号の中でとくに重要なのが言語なのです。言語はもともと音声でした。人間が身体を使って発することばには音声としての意味がありました。

しかし、人と人とが向き合う場でしか交わせないし、その場で消えてしまうものでした。それが、文字の発明によって、残すことができたり、遠方へ運ぶことができるようになりました。ところが、文字からは音声に込められた思いや感情が捨象されてしまったのです。「マルチメディア」の話題でも、データとしての文字の処理ばかりに目が向けられて、音声としての言語が軽視されているようです。

●リアリティと言語

西垣氏は、人間が生きのびるために必要としたリアリティの問題をとりあげています。

人間の論理的な思考は、二百五十年前に「シナリオを作る能力」「物語する能力」として始まった

といえます。そこでは思考と現実との関係が問題になりました。

「われわれが互いに環境世界イメージを伝え合う所から（リアリティ）が生まれるのである。主観性の域を超えて社会的に通用するから『客観的現実』となるのだ。」

つまり、人間が生きている場では、常に「リアリティ」が試されるのです。もしも、現実を正しく認識できなければ人間の生存も危なくなるわけです。そのような試練を乗り越えて人間は生き抜いてきました。たとえマルチメディアの時代でも、人間が生きてのびるためにはリアリティの確かさが必要です。

「このようにリアリティは社会的な存在だが、断片的・瞬間的な（情動）が一つの秩序とまとまりをもった（感情）となるのも、それが社会の中で認められるからなのだ。つまり（感情）とは共同体の中で作られるのである。だからそれは言語や文化と深くかかわることになる。」

そうして、西垣氏は言語によって形成される「批判精神」について述べています。

「生物としての出発点を忘れた傲慢な理性・文字至上主義ではだめなことは明らかである。とはいえ、文字の文明の中で培われてきた批判精神までごみ箱に捨ててしまつては元も子もないだろう。「人は全感覚で表現する」などとマルチメディア擁護論をとくとくと説く輩やからの中には、急速に衰えていく批判力にまるで無感覚なものが多く。「全感覚」といってもそういう感覚だけは無いらしいのだ……。」

残念ながら、西垣氏は人間の感性と言語のはたらくとを切りはなしているようです。言語を文字によるデータと考えるがちな面があります。しかし、言語を文字ではなく、人間のナマの声から考えるならば、言語がいかに深く感覚、感情、心理、思考などと結びついているか分かります。

マルチメディアの時代とはいっても、人間が世界と向き合い、また人間が人間と向き合うとき、言語は人間の意識と結びついてはたらいっているのです。言語は単なるコミュニケーションの道具ではなく、人間の生存に欠くことのできないものなのです。

2006. 5. 1
月刊通信
はなしがい
第238号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田 2-1 5-6-5 1 5

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

子どもの心理発達の研究者としては、フランスの心理学者ジャン・ピアジェ(1896-1980)が有名ですが、同じ年に生まれて論争相手でもあった心理学者が最近、注目されています。旧ソヴィエト連邦のレフ・ヴィゴツキー(1896-1934)です。わずか三十七歳の若さで亡くなったのですが多くの著書を残しました。心理学を中心に、哲学、文学、教育、芸術などの広い分野の研究があります。とくに、心理と言語との関係の研究はすぐれたものです。

先日、柴田義松『ヴィゴツキー入門』(2006子ども未来社)が出版されました。柴田氏は、これまで多くのヴィゴツキーの著作を翻訳してきた人で、この一冊でヴィゴツキーの全体像がよく分かります。ヴィゴツキーの関心の広さは次のように紹介されています。「繊細な心理学者、博識な芸術学者、有能な教育学者、たいへんな文学通、華麗な文筆家、鋭い観察力を持った障害学者、工夫に富む実験家、考え深い理論家、そしてなによりも思想家」

わたしは、ヴィゴツキーの言語理論がコトバの読み書きにどのような有効性があるか、ということに

期待しました。「第3章 話しことば・書きことば・内言の発達」で取り上げられていました。ヴィゴツキーの研究の基礎は子どものコトバの発達です。わたしもあらためて子どものコトバの発達について学び直すことができました。

●子どものコトバの発達

そもそもコトバは音声です。子どもの最初のコトバは、一歳の終わりごろから二歳のはじめにかけて、自分特有の「ウーア」「ブーア」「バーバ」などという自作のコトバです。これは「自律的ことば」と呼ばれ、特定の場面でしか意味を持ちません。池を泳ぐカモを見ても、テーブルにこぼれたミルクを見ても、みんな「ウーア」です。それと並行して、おとなの使う「パン」「ミルク」「あつい」「起きなさい」「座りなさい」などのコトバも理解します。

次の段階は、四歳ごろの「ひとりごと」です。ひとり遊びのときなど、いくつかのことをつなげておしゃべりをするのですが、人に向かって話しかけているわけではなく、自分に対するモノローグです。

これを「自己中心のことば」と言います。

「自己中心のことば」が、子どもの発達においてどのような意味を持つか、ピアジェとヴィゴツキーとの間には対立がありました。

ピアジェは、「自己中心のことば」は「子どもの自己中心性のあらわれ」であると考えました。まだ自分の位置を自覚できないまま発せられるコトバだといえます。その後、関心が外へ向いていくことで客観的なコトバになるのです。六、七歳ごろから、子どもはコトバを使うことで、自分の位置や行動をとらえて「脱中心化」します。そして、十一、二歳までに外界への順応を完成するといえます。

それに対してヴィゴツキーは、子どもの発達の別の面に注目しています。「自己中心のことば」は「脱中心化」するだけではないのです。音声で外に発せられるコトバが、より高度な内的なコトバをとまなう段階へと発達するということです。

ピアジェは、子どものコトバの発達をコミュニケーションの能力に見ています。話しコトバとして外に発する能力です。それに対して、ヴィゴツキーは、

内面化されたコトバである「内言」に注目します。そして、「内言」と思考との関係を研究しました。ヴィゴツキーの心理と言語との研究は子どもの発達について説明するだけではなく、おとなの言語能力を養成する理論としても有効です。

「内言」とは、声に出さなくても頭の中ではたらくコトバのことです。ヒトがものを考えるときにはアタマの中で内言がはたらきます。「考える」とことと「内言」とはほとんどイコールです。その能力とは、「黙って考えられる力」です。子どもはコトバを声に出さないと考えることができません。「自己中心のことば」は考えのはじまりです。

おとなになるにつれて、コトバを声に出さなくても、アタマにコトバが浮かぶようになります。つまり、内言を操作できるようになります。それで、黙って考えられるのです。それが「内言力」であり「思考力」です。

●思考力と書きコトバ

ところで、思考力はどうようなコトバの訓練によつ

て発達するのでしょうか。ヴィゴツキーは「書きコトバ」の能力を取り上げます。書きコトバによってこそ、コトバの意識性が育つといえます。「書く」とは考えることである」とよく言われます。その意味はここにあります。書きコトバの特徴は二つです。

第一は、書きコトバは「内言」で行われるということです。つまり、話しコトバは、イメージしたことを直接、音声のコトバとして発するものです。それに対して、書きコトバは、イメージしたことをアタマの中の「内言」として操作されます。

第二は、話し相手がいない「対話」だということです。文章はモノローグのかたちをとりませんが、アタマの中でのコトバのやりとりです。それも「内言」によって行われる「対話」なのです。

このような特性が、書くことを困難にしています。しかし、書きコトバこそ、その場がないことについて考える「想像力」を育てるのです。話しコトバならば、その場に应じたコトバのやりとりで間に合います。もちろん、それに必要なコトバの能力です。しかし、その能力は、どのようにして鍛えられるの

でしょうか。何度も話すことを繰り返せばよいかなというのでは経験主義です。もつとよい方法はないのでしょうか。

じつは、それも書きコトバの訓練によって鍛えられるのです。私たちは、いきなり話し場に直面するわけではありません。いつ、どこで、どのような場面で、どのような話し方をするのか考えてみるのです。そして、あらかじめ場面を想定することで、その場にふさわしい内容を文章に書くことができます。これが書きコトバによって考えられるということなのです。

というわけで、書きコトバを中心にした言語教育こそ、学童期の子どもの教育の中心にすえられるべきものです。言語能力を向上させるには、わたしが以前から提唱している二つの方法があります。一つは、話しコトバの能力を鍛える「表現よみ」、もう一つは、書きコトバの能力を鍛える「書きなれノート」です。どちらも「内言力」を高める訓練になります。子どもばかりでなく、おとなの言語能力を高めるためにも有効な方法なのです。

2006. 6. 1
月刊通信
はなしがい
第239号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田 2-1 5-6-5 1 5

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

今、インターネットでは若い人たちの間でブログが盛んです。ブログというのは、「ウェブログ」の略です。「ウェブ」とはインターネットを意味する「網」のこと、「ログ」とは船の航海日誌などの意味です。それが省略されて「ブログ」と呼ばれます。つまり、インターネットに公開する日記のようなものです。

わたしが一〇年ほど前にホームページを公開した当時も、ホームページを作ることがはりました。しかし、ずいぶん手間がかかるものです。ページの体裁を考えたり、デザインを考えたりしなければなりません。ところが、ブログは操作が簡単なので、日記を書くようなつもりで気楽に文章が書けます。しかも、いろいろなネット会社が提供するブログのページは無料なのです。

しかし、正直いって、ブログに書かれた文章は他人がよむほどの価値のないものがほとんどです。九十%以上、いや九十九%でしょう。書き手は、書くことに何かの意味を感じているのでしょうか、他人にとっては意味のないものばかりです。いわば、友

だち同士でやり取りをする携帯メールの延長のようなものなのです。

●大塚英志『転換期の文学』

わたしは、そんなブログの文章を繰り返して眺めながら、「インターネットはゴミの山」などと、かつて読んだ本のタイトルをつぶやいていました。ところが、この現象の歴史的な意味を見事にとらえた人がいました。大塚英志『転換期の文学』（2005春秋社）です。

ここ数年、わたしは大塚氏の評論活動に注目してきました。ほとんどの著書を読んでいます。この通信でも何冊も紹介してきました。その中でも、今回の本は優れたものです。「転換期」は「文学」に限られません。コトバに関する日本の文化についても問題にされています。いわば、この本は現代文化をコトバの面から根本的に批評する本です。

これまで、わたしは大塚氏の評論をおもしろく読みながらも、その思想の全体像をつかみかねていました。大塚氏は大学で民俗学を専攻して、アニメや

漫画の評論家として出発し、自分でもマンガの原作を書いていきます。また、小説のストーリーの作り方を書いたハウツー本を出す一方で、純文学の作家と文学について論争をしたり、憲法の前文を書く運動などもしています。わたしには、これらの行動が一貫したものと感じられず、なんとも不思議でした。それが、今回の本でまとまって見えてきたような気がします。

●「近代のやり直し」とは？

大塚氏が前提とするのは、日本語の乱れとか崩壊などといわれる現象はもちろん、現代の若者たちがインターネットに独り言のような文章をたくさん公開している状況です。これをいったいどう考えたらいいのでしょうか。

大塚氏は、これらの現象と日本の近代の出発点を重ねて考えています。つまり、どちらも、国民が自覚を持って自らのコトバで自らの考えを語ろうとしている時代だと言うのです。

現代の社会はコトバも思想も混乱しているようで

す。インターネットのブログは、その典型です。しかし、かつて日本の近代の始まりもそうでした。明治維新から始まった近代化のなかで、人々は新しいコトバを使って、新しい思想を生み出そうとしたのです。

大塚氏はコトバによる日本の近代化に二つの流れがあったと言います。一つは、田山花袋に代表される「私小説」の流れ、もう一つは、柳田国男に代表される「自然主義」の流れです。田山花袋は、いわば「私小説」と文学者の創始者です。花袋は「文学」という手段を使って自己確認し、自らを文学者という特権者に育て上げました。

大塚氏には、このような特権的な文学者に対する反発があります。今日、「純文学者」を相手に論争を行う思想的根拠はここにあります。それに対して、柳田国男の仕事が高く評価します。柳田の仕事は、書き手としての自分を作者として特権化することではなかったといえます。

柳田の考えを大塚氏は次のように解説しています。

「まず「個々」がちゃんと自分について言語化で

きる技術を持った上で、互いに話し、相手の言うことも聞いて、接点や違いを踏まえつつどうにかやっていけそうな共通の新しい「人生観」を作ろうよ」

柳田の代表作『遠野物語』は、聞き書きで書かれたひとりの人間の証言です。コトバで語ることの根本となります。柳田は続いて多くの発言が出ることを期待しました。それら多くの発言が合流して付き合わされることで人々の共同社会が生まれると考えたのです。民主主義の基本的考えです。大塚氏が、みんなが憲法の前文を書こうと提案して本にまとめる活動をしたことの意味も分かります。

●近代的個人とコトバの力

わたしの関心は教育の問題に向いてゆきます。

「近代のやり直し」のためには、どのような能力が必要なのでしょう。大塚氏は、現代のコトバの行く末について次のように述べています。

「さて、仮に「現在」が「ことばの更新期」であつたとすれば、人が論理的にとりうる選択は二つある。一つは、かつて明治の若者たちが「言文一致体」を

見出ししていったように何か「新しいことば」をそこに立ち上げるうねりに加担すること。もう一つは、「世界」や「現実」やあるいは「私」を支え得なくなった「近代のことば」を、しかし何とか立て直し、今しばらく使えるようにすること。重要なのは、この二つの立場は決して対立しない、ということだ。」大塚氏には『戦後民主主義のリハビリテーション』という著書もあります。そこから、さらにさかのぼって「近代のやり直し」にまで到達しました。憲法改訂が議論される今日、自分と国との関係を考えるためにも個の確立が必要です。それはコトバによって共同体の形成に参加できる能力です。その基礎となる条件は、インターネットのブログに代表されるテクノロジーとコトバとの関係です。

「こののち、このテクノロジーのもたらしたツールを活用して、本当に僕たちは「近代的個人」になれるのだろうか。それとも「なれない」ということを逆に立証してしまうのだろうか。」

この問いへの答えは、やはりコトバをめぐる教育のありように関わってくるものです。

2006. 7. 1
月刊通信
はなしがい
第240号
刊行20年記念号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

内田樹^{たち}さんは「旬」の批評家です。わたしが最近読んだのは春日武彦さんとの対談『健全な肉体に狂気は宿る——生きづらさの正体』（角川oneテーマ21）という本です。縦横無尽と言いたくなるような話しぶりで、さまざまな問題が語られています。

●「不安」からの脱出

カバーには「『自分探し』『自己実現』に疲れ果てた人へ」と紹介されています。現代人の「不安」は、「自己」の確立を迫られたがために生じたものです。それが大きな負担になっています。「不安」からの脱出法について内田さんは語ります。

「『自己』って単体で存在するわけではなくて、人間たちを結びつける社会的なネットワークの中でどういう役割を演じるかということで事後的に決まってくるものなんです」

内田さんは、授業を受け持っている女子大学の学生にもこう語ります。

「君の能力や資質のうち、他人が必要とするものを提供し続けてゆくことが『キャリアパス』なんで、

どれがキャリアになるかを君は自己決定することはできないんだよ」

この考えならば「自己」を問いつめずに楽に生きられます。「夜回り先生」として子どもたちを救っている水谷修さんがよくいう「他人のためになることをしなさい」ということばにも通じるものです。

先の先を考える必要がなくなるので、「取り越し苦労」もなくなります。「不安」はほとんど取り越し苦労です。「こうなったらどうしよう、こうなったらえらいことになる……」という思いです。しかし、「一瞬後には何が起こるかわからない」のです。

内田さんはこう言います。

「日常的な経験のほとんどは取り返しがつくんですよ。「リセット」ということではなくて、文脈を変えることによって、過去の意味が変わってくる、ということなんです。」

「自分探し」と時間との関係についての関係もおもしろい考えです。「自分探し」は、地図のような広がり的一点に立って、目の前に「未知の領域」が広がっているイメージです。内田さんは、そんな

うのが常識です。しかし、そこに、「おじさん」や「お婆さん」を加えるべきだということです。

「父がいて母がいて子どもがいる家庭に、男の子にとっては、母親の兄か弟にあたるおじさんが父親に拮抗する役割を引き受けるわけです。父親が子どもに示す価値観に対して、常にその逆を示す。それによって、家庭内にある種の流動性が生まれるわけです。」

「その家庭の中で、権威を持っている人間に対して、その人と同性でほぼ同じくらいの社会的地位にいる人間が、ドミナントな価値観とは「ずれた」価値観を示すというかたちで、親族が固定化することを防ぐ」ということです。

たしかに、志賀直哉の小説「母の死と新しい母」でも、「おじさん」が重要な役割を果たしていますし、NHKの朝のドラマ『純情きらり』でも、「お婆さん」の活躍が目立っていました。

内田さんは、人が「不安」になることの根本には「父権制イデオロギー」があるといいます。「何か強大で強大なものが世界を一元的にコントロールし

てい」という考えです。この考えでは、何か悪いことが起こると、「単一の責任者」を考えます。それによって「不安」を解消しようとするのです。ところが、内田さんはそうは考えません。

アントニオ猪木の次のコトバをあげています。

「ピンチと言うのは無数のファクターの総合的な効果である」

こう考えると、不幸について考えることがずいぶん楽になります。

「自分が不幸な目にあっているのは、さまざまなファクターの複合的な効果であって、もしほんとうにそこから脱したいと思っているなら、その不幸を構成しているさまざまな要素を一つずつ丹念に取り除いていくしかないんですね。一つ一つはものすごく小さいものだから、その除去作業自体はわりと簡単なんですよ。」

内田さんはフランスの哲学が専門ですが、最初に読んだ構造主義の哲学の解説本にも個性的な考え方がたくさんありました。ここに来て人と人生について語る哲学にさらに深まりが出てきたようです。

「自分探し」は「すぐろく」のイメージだといいます。つまり、「自分」というキャラクターは少しも変化せずに、平面的に広がった世界をただ歩いて行くだけのゲームです。ところが、実際の人生では、「一秒後の私」はもう「今の私」とは別のものです。時間とともに変化し発展してゆくのです。

●「戦闘ゲーム」と人間の成長

内田さんは「洋服というのは、その人の一番弱い部分とか感受性のやわなところが外部に露出しているところ」だといいます。そして、服の本来の機能というのは「入れ墨」「ピアス」などから始まった呪術的なものだ」と言います。服装とは、「戦闘モード」の象徴だということです。若い人の好むアニメには「モービルスーツもの」があります。人間が巨大なロボットに乗り込んで操縦するようすは戦闘服の延長です。かつて、若者が迷彩服を着ることが問題になりました。しかし、今では洋服からアクセサリーに至るまで、「戦闘能力」を高めそうなデザインのもものが店先に並んでいます。

このモデルとなるのが、戦闘をテーマにした「自分探し」のゲームです。「敵」と戦って勝利すれば、武器が獲得できて「戦闘能力」が高まるのです。わたしは以前に手塚治虫の漫画「どろろ」を自己成長の物語として論じました。出世のために、父親が生まれてくる赤ん坊のからだの各部を妖怪に譲り渡しました。そうして生まれてきた子どもがのちに自らのからだを取り返すために妖怪と戦っていく話です。

これと今の戦闘ゲームとは大きなちがいがありません。今の戦闘ゲームでは、戦闘能力を高める武器が付け加わるのですが、「どろろ」では、失われている人間の能力がよみがえります。しかも、その戦いの目的が直接に自分の利害を目指すのではなく、「世界の方が自分に向けて呼びかけてくる、それにどう答えるか」という行動なのです。

●家族の構成と不幸のファクター

内田さんは、家庭教育についても、ユニークな発言をしています。とくにおもしろいのが、家族の四つの構成単位の考えです。家族というと核家族とい

2006. 8. 1

月刊通信

はなしがい

第241号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

夏休みに合わせて『ゲド戦記』というアニメ映画が公開されています。たまたま読んでいた本の著者が、この原作者であると気がつきました。偶然のことです。わたしが読んでいたのは、アーシュラ・K・ル＝グウィン『夜の言葉―ファンタジー・SF論』（2006岩波現代文庫）です。著者が女性であることも意外でした。SFとは、サイエンス・フィクションの略語で、科学の知識を生かして書かれた虚構の作品です。著者は、『ゲド戦記』に代表される自分の作品を、SFではなくてファンタジーだと主張します。ファンタジーとは、ストーリー性の豊かな虚構の作品です。そして、作品の中心に位置するのは人間であり、人間の存在感を通じて語られる真実だといえます。

●「子どもと影」の寓話

この本には十二の講演や論文が収められています。わたしが感心したのは「子どもと影」という講演です。アンデルセンの童話を題材にして人間の自我について論じています。アンデルセンの童話は、こん

な話です。

都会へ出てきた青年が暮らす向かいの家の美しい娘を好きになりますが、なかなか声をかけられません。ある夜、ろうそくの火が作り出した自分の影が向かいのバルコニーに届いたとき、青年が「その家へ入れ」というと、影は青年から離れて家の中へ入っていききました。その後、青年には新しい影ができます。年をとるまで勉強に励んでも学者として成功できません。中年になったある日、もとの影が戻ってきます。影は人の弱みにつけ込んで学者を言いなりにします。影が主人で学者は従僕にさせられます。そして、最後に学者は影によって殺されます。

グウィンは、これを人間の自我の問題として語ります。人は一面では文明化した主人公として振る舞います。「学問があり、親切で、理想を追い、かつ節度を知る人物」です。しかし、影の面として、「主人公の実現されなかった利己主義、許されざる欲望、けつして口にされることのなかった罵り、犯されざる殺人」などを具えています。影とは、「魂の暗い半面であり、許されざるもの、許しがたいも

つまり、〈自己〉という偉大な、未開拓の領域を自分と同定(?)しなければならぬのです。」

「同定」というのは、ふしぎなことですが、「向き合う」といった意味でしょう。ユングはこの領域を〈集合的無意識〉と呼んで、「全人類が一堂に会する場であり、自身の共同体の成立の基盤である」と考えたのだそうです。

以前に、「人類はみな兄弟」などというスローガンを聞くと、わたしは嫌な感じがしました。しかし、人間同士が公共の場で生きるときには、たしかに共通の場があるのです。

わたしたちは子どもの世界をヘンにきれいごとにしてしまったり、逆に「影」の面ばかり見たりします。二つの面をまとまりとして見ずに、その時々に取り離れています。しかし、大切なのは、光と影との一体化です。自分の全体を光と影との統一として見ることなのです。影を見つめようとしないと、影の力は恐るべきものになります。「人が自分の影を見ることが少なければ少ないほどその力は強くなり、ついには一種の脅威、耐え難い重荷、魂の内なる恐

怖の種ともなりうる。」

さて、子どもたちの成長にとって、影にはどんな役割があるのでしょうか。

小さな子どもたちは、影を自分の外にある恐ろしいものと考えます。しかし、思春期になって「自分」を認識するようになると、影を外部のものにはできなくなりません。自分の行動や感情に責任をもつとともに、「罪悪感という恐ろしい重荷」も背負いこみます。そこから、どのように脱出したらよいのでしょうか。それは意外に簡単なことです。

「若者にとって、この時期の自立と自己嫌悪の呪縛を切り抜ける唯一の方法は、真にこの影を見据え、面と向かい、このイボも牙もニキビにも釣づめも何もかも自分自身なのだ、自分自身の一部なのだと認めることです。」

この心がけは何も若者に限ったことではありません。わたしたちおとなも、生きている限り日々繰り返すべきことです。この本のタイトル「夜の言葉」とは、まさに、この影が発する無意識のことばに耳を傾けるということなのです。

の」です。

だからといって、影を否定してしまえばいいというわけではありません。「この怪物(注Ⅱ影)が主人公の一部であって、彼と一つのまとまりをなしており、全面的に否定してはならない」。「アンデルセンの物語が言っていることは、自分の影に直面せず、それを受け入れもしない人間は亡者のようなものだ」というのです。

●自我と共同体の意識

影に関する人間の心理が、心理学者ユングの考え方にもとづいて分かり易く解説されています。ユングは「自我」とは「自己」の一部にすぎないと考えます。そして、「自己」とは「個人の所有に帰するものではなく、集合的なもの、つまり私たちは全人類と、そしておそらく全存在とも、この〈自己〉を共有しているのです。」

今、日本では一人ひとりの人間のモラルの低下が問題になっています。個々の人と公共との関わりは、現代の重要なテーマです。どうしたら個々の人が公

共の意識にたどり着けるのか。次のような指摘があります。「自分が自分自身以外の者、自分自身を超えた、より大きなものの一部だということを認めなければならぬ」

ただし、自我が弱かったり、ましなものがないと、自我は自分を〈集合的意識〉と同一視してしまいます。具体的には「〇〇崇拜、ドグマ、一時的流行、ファッション、出世競争、慣習、当たり前のように信じられている常識、広告、ポップカルト、あらゆる××主義やイデオロギー」といった意識です。それらは「真の意味での交わりや体験の共有を欠いた、空虚な、形式だけの集団思考」です。人はその中で〈寂しい大衆〉のひとりにならざるをえません。

●子どもの成長と影

では、そこからどうやって脱するのか。そこで再び「影」の持つ価値が見直されます。

「真の共同体を獲得するためには、自我が内へと向かうこと、群衆に背を向け、根源へと向かうことが必要です。自我は自分自身の内の、より深い領域、

2006. 9. 1

月刊通信

はなしがい

第242号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田 2-1 5-6-5 1 5

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

一芸に秀でる者はなんとかと言いますが、確かに一流の仕事をする人の考えはすばらしいと思いました。久石譲著『感動をつくれますか？』（角川on e テーマ21）を読んだ感想です。久石氏は映画音楽の作曲で活躍する人です。アニメ映画に関心ないわたしでも、宮崎駿監督「ハウルの動く城」「もののけ姫」などの音楽を担当者だと知っていました。

久石氏はこの本でもものをつくる喜びを語っています。ものを作る姿勢には、二つの道があるといいます。①自分の思いを主体にして、つくりたいものを作る生き方。②自分を社会の一員として位置付けてものづくりをしていく生き方。

久石氏はもともとクラシック音楽の出身で、①の立場から前衛的な音楽の作曲をしていたそうです。しかし、今では①と②とを統一しながら仕事をしています。「つねに創造性と需要の狭間で揺れながら、どれだけクリエイティブなものができるかに心を砕く」、そして「人に喜んでもらう、人のためになる音楽を作りたい」といいます。

わたしは若いころ、白樺派の考えを人生の基準に

したことがありました。「自己を生かす」という考えです。自己中心的な考えのようですが、徹底すればいつか「人のため」に転化します。たとえば、世界に不幸な人がいる限り、自分の心が痛むのだから、人のために何かしてやりたくくなります。久石氏も、作品の良さがすべてだと考えて、自分の満足のゆく作品をつくることを目指しています。

●作曲の能力とは何か？

作曲という創造的な仕事にはどんな能力が必要なのでしょう。久石氏は「作曲には、論理的な思考と感覚的なひらめきを要する」と書きます。そして「感性」と言われるものの九十五%が「論理性」ではないかといいます。それは「知識や体験などの集積」です。そして、残り五%が「作りのセンス」

「感覚的ひらめき」つまり「直感」だということです。

これは現代の若者がタレントを志望する風潮への批評です。若者たちは自分に才能があるかどうかすぐに決定しがります。しかし、才能が九十五%、知識や体験などに依存すると知ったらどうでしょう

か。センスとひらめきだけの才能では、先行き怪しくなるのは当然です。たしかに、「感性」は貴重です。知識や体験などに解消されない才能かもしれません。久石氏は次のゲーテのことばを引用しています。わたしも好きなことばです。

「感覚は欺(あそび)かない。判断が欺(あそび)くのだ。」

ただし、これは偉大な教養人として学識の高いゲーテだから自信を持って言えることばです。

そこで問題となるのは、直感や感覚をどう生かし、どう育てていくかです。そこに教育の問題があります。久石氏も次のようにいます。

「最近いろんな人と話していて思うのは、結局、いかに多くのものを見て、聴いて、読んでいるかが大切だということだ。」そして、映画や本などを例にあげて、「さまざまところにアンテナを張り、たくさん観て、聴いて、読む。行って、やって、感じる。自分に溜(ため)め込む知識や経験知の量を、極力増やしていく。」というのです。その結果、「感性」や「直感力」が育つわけです。

さて、近ごろの若者には、自分の能力を磨こうと

せず、ありのままの自分にとどまる傾向があります。能力の不足を感じたなら磨けばいいのです。久石氏の考え方は示唆的です。偶然的出会いすら、自分の成長のための好機とします。そこには自分の能力や自分を固定したものではない考えがあります。これこそ芸術家である人間の魅力です。

「僕は『偶然的出会い』を非常に尊重したい派だ。なぜなら、確固たる自分なんかないと思っているからだ。自分の力など絶対的なものではない。さまざまな影響を受けながらものをつくっていく中で、多少『自分らしさ』として浮かび上がってくるようなものでしかない。」、「自分も仕事も感性も、すべて確固たるものなどない」というのです。

●音楽の能力と言語論理教育

久石氏は、現代の教育についても提言しています。日本と中国の伝統的な音楽の演奏法を比較して、日本人は過去の形を忠実に守っていくものの創意工夫がないといいます。個人の音楽家でも同様です。クラシック音楽のコンクールに入賞した演奏家が、海

外のオーケストラに入って伸び悩んでしまいます。

「譜面どおりに弾いて正確だし、技術もしっかりしている。ところが、自分の音が浮いている。どう演奏していいか分からなくなってしまう。初めて自分の音楽に向き合わなくてはならなくなったときに、目標が見つからないために、どうしたらいいかわからない。」

現代の教育への久石氏の提言は単純です。

「僕らが今、子ども世代に最も伝えなければならぬことは感じ取る心を持つということだ。」たとえば、戦争について考えさせるにも、戦争は悲しいいけないという「意識を持てれば知識は後からついてくる。」といいます。久石氏は、教育者ではありませんから、「感じる心」を強調するだけで、教育の方法には立ち入りません。しかし、ここまでの考えをたどり直せば、教育の道が見えてきます。

「感じる心」つまり「感性」とは、九十五%の論理的な思考と、5%の感覚的なひらめきによって働くものです。これまで日本の教育は「知育偏重」として批判されてきました。そして、「感性」や「情

緒」などの情動的な面の教育が強調されました。

今、久石氏の唱える「感じる心」とは、単なる感情ではありません。九十五%の論理力と5%のひらめきとの統一です。久石氏が「知識」とは言わずに「論理力」を強調したところは、芸術作品の創造者としての久石氏の面目躍如たるものです。

今、教育に必要なのは、断片的に詰めこまれる知識ではなく、現実認識をめざして論理的に働く生きた体系的な知識なのです。それこそ、子どもたちの「感じる力」を育てるものです。

わたしは以前から、コトバを使って論理的に考える能力をつける「言語論理教育」を提唱しています。コトバと思考とは切り離すことできません。久石氏も「はじめに」でこう述べています。

「人間は、ものを考えるという行為を、言葉を紹介してやっている。」

創造的な芸術活動は、無から生まれるものではなく、コトバによる論理的な思考活動に支えられています。「感性」や「直感」の土台にはコトバを使つた論理的な思考能力があるのです。

2006. 10. 1

月刊通信

はなしがい

第243号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田 2-1 5-6-5 1 5

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

九月に終了したNHKテレビの朝の連続ドラマ『純情きらり』の主役の宮崎あおいさんの演技は素晴らしいものでした。しばらく朝のドラマに注目しなかったわたしも、しばしば画面に引きつけられました。しかし、その声についてはずっと気になっていました。アニメ映画の吹き替えのような幼児声なのです。新聞の投書にも、「主人公が成長して行くのに主役の女優が若いままなのはおかしい」というものがありました。せめて、あの声がおとなに変わるだけでも、成長過程は表現できたでしょう。

●日本の伝統的発声法

わたしはこの十年ほど、意識して自分の声の発声法を工夫してきました。近ごろは、「方丈記」や「おくのほそ道」などの古典のよみを録音して、インターネットで公開しています。

そして、気がついたのは、日本の伝統的な発声法があるということです。しかし、現代の日本人には伝統的な発声法ができなくなっているのです。そのいい例が時代劇です。時代劇そのものがテレビでも

映画でも少なくなっているうえに、俳優たちが時代劇らしい発声ができなくなっています。わたしが子どものころには、東映時代劇が全盛でした。歌舞伎の世界から移ってきた俳優たちが、これぞ時代劇の声という台詞の声立てを作り上げていました。中村錦之介、月形龍之介、東千代之介、片岡千恵蔵などのセリフの言い回しを聞けば、それがどのようなものか分かります。

ところが、今の若手俳優たちが一言、セリフをいうと、いかにも現代風のものになってしまっています。とても時代劇とは思えません。

日本の伝統的な発声法には、いくつかの特徴があります。腹の底から出てくる息、ノドの力を生かした発声、高低ではなく強弱によるアクセント、などです。

発声の要素は四つあります。①息、②ノド、③舌、④口——現代風の発声ではとくに①と②に問題があります。一般にコトバの批判というと、発音やアクセントやイントネーションに向けられますが、むしろ根本は息の吐き方やノドの力の入れ方にあるので

す。つまり、一つは、身体全体を使った力のある息が出せないこと、もう一つ、声帯周辺の筋肉に力を入れた強い声が出ないという問題なのです。

●米山文明『声と日本人』

最近、米山文明『声と日本人』（1988平凡社選書）

を読んで、学校教育における発声教育の必要性を感じました。数年前に、斎藤孝氏による「声に出して読む日本語ブーム」というものがありました。今ではずいぶん下火です。というのも、「読む」ということについて、発声指導の面でも、内容理解の面でも深まりがなかったからです。

米山氏は、声帯を中心にして発声の研究をしている人です。大勢の外国のオペラ歌手の声帯の治療してきました。おもに、声楽の発声研究をしています。が、この本では、すべての発声行為、つまり話し声にも通じる根本的な発声法を提唱しています。

わたしは、これこそ学校教育で行われるべき発声訓練の根本だと思います。米山氏がその方法を思いつくにはきつかけがありました。じつは、わたし

自身も同じ舞台から同じ印象を抱いていました。

一九九二年に演じられた木下順二の群読劇『子午線の祀り』です。新劇、歌舞伎、能、狂言などのさまざまなジャンルから集まった役者たちが作り上げた舞台で、時には声を合わせて「群読」というものでした。

米山氏は、個々の役者のセリフ直しには感心しながらも「群読」について次のように書いています。

「ところが群読に入ったときふと気がついた。もちろん声の高さも強さも違うのは当然であるが、セリフもよくそろい、テンポ、タイミングも見事である。しかし何か物足りない。聞いているうちにそれが何であるのか次第に鮮明になってきた。／音源になっている喉頭原音と、喉頭から下部に生ずる体全体を含めた体壁振動があるか否かの問題である。確かに声の音色は多彩で変化に富み、それなりに素晴らしいのであるが、各種の声の土台となって喉頭部分より下で作られて支える共通の響きがないのである。聴いていて群読全体としての声の根底に大きな不安定感を持った。」

●基本的な発声訓練

米山氏の発声訓練は次のような方法です。

「受講者たちは第一段階では発声を離れて呼吸法を中心に学び、ある程度会得した段階から少しずつ声を作るところに進む。この発声に入る段階で、呼吸の流れに乗らせて各自勝手に声を添えるように指示する。言葉ではなく、単一母音（各自勝手に母音、あいまい母音でよい）、音の高さ、強さ、持続、音質とも個人の自由である。この場合「声を出す」ということをとくに意識させないように、母音も明確な構音ではなく、「ウ」でもなく、「ア」でもないようなあいまいな声（動物のうなり声のような感じの音）を乗せながら呼吸を送り続ける。／このようにして発せられた声の集合音はふしぎなことに、何とも言えないような溶け合った音になるのである。」

これによって、前に挙げた二つの問題点のうち、

息の吐き方は解決します。もう一つ残された問題として、ノドの力の鍛え方があります。こちらは、演劇、歌舞伎、能、狂言などのジャンルによって求められるものに差があります。また、話し声の分野でも、アナウンス、ナレーション、朗読、あるいは講談、落語、浪曲などによってノドの力の必要性には差があります。しかし、あらゆるジャンルに共通する発声の基本は次の二つです。

一、高低ではなく、強弱でアクセントをつけられる能力——これで英語の発音のアクセントも向上します。二、口先からの発音ではなく、喉の奥で飲み込んだノドの力の入れ方——これはコトバと意識とのつながりを成り立たせる基本です。

世間では、たかがコトバではないかという風潮が一方にはあります。しかし、声によるコトバの表現によって、思考能力が高まることはもちろん、自らの感情をコントロールしたり、意志の力や精神力を高められるのです。まさに、「コトバの力＝生きる力」なのです。

2006. 11. 1

月刊通信

はなしがい

第244号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田 2-1 5-6-5 1 5

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

言語理論を学んでいる読書会で、わたしは作文について書かれた一節に出会いました。注目したコトバを太字にして紹介します。

「作文というものは文章による表現能力の訓練のために存するもので、形式的陶冶による教育の一段にすぎないものであつて、それが仮に論議的なジャンルないスタイルのものであつても、議論の内容そのものは、そこでは元来問題ではないのである。」

（戸坂潤『思想としての文学』1936）

これは、作文には価値がないといっているのではありません。それどころか、作文教育の本質的な意味を改めて問い直すコトバなのです。

戸坂潤（1900-1946）は哲学者です。作文教育の意義を深くとらえています。日本の哲学者の中で、これほどコトバにこだわった人はいません。今では、コトバを問題にする学者はめずらしくはありませんが、七十年前も前のことなのです。プラトンやアリストテレスの時代から、哲学者はコトバというものにこだわってきました。そもそも哲学とは、ものごとを根本から考えることです。考えることとコトバの

はたらきとは深い関係があるのです。

●人間・考え・コトバ

「人間はコトバを使って考える」というと、「いや、そればかりじゃないよ」という人がいます。たしかに、考える手段はいろいろです。画家は線と形と色で、彫刻家は体積や容量で、ダンサーは体で考えます。つまり、考えるためには、「考え」の乗り物となる手段が必要なのです。それらの手段の中で、人間ならだれでも使えるもつとも手近な手段がコトバです。コトバのはたらきは、①話し、②聞き、③読み、④書き、と四つあります。

もともとコトバは音声ですから、「話し・聞き」のやりとりが基本です。だれかが話したコトバを別のだれかが聞いて、人から人へと考えが伝わります。頭に浮かんだ観念がコトバと結びついて「考え」になります。本を読んだり映画を見て感じたことについて、人と話をするとき自分の考えがはつきりするの、コトバが使われているからです。さらに「読み・書き」となると、文字を使ってもっと厳密に考え

ることができます。

● 作文教育の考え方

現在、学校では、どのような作文教育が行われているのでしょうか。わたしが知っているのは次の二つです。

①お手本とする文章を写す——昔から行われている作文教育法です。名文といわれる文章をそのまま書き写したり、それを下敷きとして文章を書くような教育方法です。

②出された題について書く——題名や「○○について」などとテーマを出して書かせるものです。学校では「行事作文」などと呼ばれています。旅行に行けば旅行のこと、運動会があれば運動会のこと、といった具合です。

どちらも、作文を書かせるきっかけにはなりますが、どのように書けばよいのかという指導がありません。

私自身、小中高と作文の書き方というものを教わった覚えがありません。わたしが文章を書けるように

ためのものである。

(3) 作文は形式的な面から文章による表現能力を鍛える手段である。

作文は論文と対比されています。つまり、論文は、内容の価値が問題にされますが、作文は、形式から内容に迫るための訓練です。最初から価値ある内容が書けるわけはありませんから、形式にしたがって考える訓練が必要です。それが作文の教育です。

わたしも、以前から考える力をつけるための文章指導をしてきました。形式の面から、考え方つまり書き方を鍛える教育です。そのために、いくつかのレベルから訓練方法を考えています。それは次の三つです。

①単語で考える ②文で考える ③文と文の関係で考える

①単語でできることは、比較と分類です。まず、思いついたことを単語で羅列します。それから、単語同士を比較して、共通性においてまとめます。まとめ方は一通りではありません。考えの角度を変えると、共通性も変化します。たとえば、「トマト」

なったのは、大学に入学してから意識的に日記をつけたのがきっかけです。高校のときにも、ときどき日記はつけていましたが、どのように書くかということは考えずに、まったくの自己流でした。

考え方には、きまりがあると知ったのは、大学で「論理学」に出会ったときです。それは哲学の分野でした。「考え」は、コトバで組み立てるものだということも知りました。それがわたしの哲学の目覚めでした。

というわけで、わたしは、考えを組み立てる学問として哲学を学び始めました。その後、いろいろな哲学書を読みましたが、日本の哲学者の中で最も優れているのが戸坂潤の哲学だと思えます。ひとこと言くと、唯物論の哲学です。現実を根拠にしてものごとを考えて、現実を変革するための哲学です。

● 考えるための作文教育

作文について戸坂潤の考えのポイントは三つです。

(1) 作文は教育の手段である。

(2) 作文は文章を使って表現する能力を訓練する

は、「キュウリ」といっしょに野菜に分類されます。しかし、色では「郵便ポスト」、形では「サッカーボール」の仲間になるのです。

②文でできることは「判断」です。文は主部(ダレガ・ナニガ)と述部(ドウスル・ドウダ)との組み合わせでできています。それが「考え」の基本単位です。「金、飯、風呂」などの単語を言うだけでは「考え」にならないので人に伝わらないのです。

③文と文が論理的につながって文章になります。文と文とのつながりは接続語による論理によって分類できます。わたしは接続語を十一通りに分類して、考え方の論理的な展開をとらえています。

以上のように、三つのレベルから作文教育の形式的な訓練ができます。わたしはそれを「文章トレーニング」と呼んでいます。

論理学を現実に生かすためには、「考え」は文章のかたちまでに具体化して表現されねばなりません。それによって、初めて「考え方」の教育になります。そう考えると、哲学者である戸坂潤の作文教育の考え方がいっそう深い意味をもってきます。

2006. 12. 1

月刊通信

はなしがい

第245号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田 2-1 5-6-5 1 5

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

このところイジメによる自殺が問題になっていきます。イジメの問題は日本社会の縮図です。おとなの社会の人間関係が子どもの社会にも表れているのです。さまざまな対策が議論されていますが、一時的なものでは解決しないように思われます。

子どもたち自身の問題もあります。体力も精神力も数十年間、低下しつづけています。立ち幅跳びのできない子ども、倒れても手をつけずに顔をぶつける子ども、ボールが投げられない子どもなど、本当かと驚いてしまいます。

●先生が取るべき道

中島義道『〈対話〉のない社会』（1997 PHP新書）を読み返しました。いじめについてもずいぶん書かれています。中島氏はいじめの対極には「思いやり」や「優しさ」の強制があるといいます。そして、その陰に「利己主義」があると言うのです。

「教室で「いじめ」らしいことが起こったとしても、先生は加害者を特定することを激しく嫌う。」

そこには、先生自身の「利己主義」があります。

「すべての生徒を納得させようとし、すべての生徒から批判されたくないゆえに、先生は悩み苦しむ。あらゆる父兄から教師からも、はてはマスコミからも批判されないような道を歩もうとして、先生はもだえ苦しむ。その苦悩は思慮深い外形をしているが、実は怠惰や無責任と紙一重である。」

ここに、〈対話〉にかかわる日本社会の根本問題があります。それについては後で触れることにして、先生が取るべき道はハッキリしています。

「しかし、そんなこんなはすべて二の次なのだ。〈今ここ〉で全神経を集中させるべきこと、それは被害者を死なせないことである。」

「被害者の発するサイン」と「目撃者の証言」を信じて行動することです。

「自分の直感と経験を頼りに断固とした行動をとり、最終的には自分が責任を引き受けるべきである。」

●「思いやり」と「優しさ」の罪

中島氏が著書の中で最も強調しているのが「責任」です。「〈対話〉のない社会」とは、個人が言葉を

ところが、日本では、お互いの「一致」や「協調」ばかりを求められます。自分固有の考えを持つような人は、ますます発言しにくくなるのが日本の社会です。それはもう精神の領域におけるファシズム（全体主義）と言えます。〈対話〉のないところ、〈対話〉のない社会には、進歩も発展ありません。

●〈対話〉のある社会とは？

最後に、中島氏が「〈対話〉のある社会」として示す九箇条、これが素晴らしいのでそのまま引用しておきます。

①私語が蔓延しておりながら発言がまったくない社会ではなく、私語がなく、素朴な「なぜ？」という疑問や「そうではない」という反論がフツと口を吐いて出てくる社会

②弱者の声をおしつぶすのではなく、耳を澄まして忍耐よくその声を聞く社会

③漠然とした「空気」に支配されて徹底的に責任を回避する社会ではなく、あくまでも自己決定し、自己責任を取る社会

④アアしましょう。コウしましょうという管理標語・管理放送がほとんどなく、各人が自分の判断にもとづいて動く社会

⑤紋切型・因習的・非個人的な言葉の使用は尊重されず、そうした言葉使用に対しては、「退屈だ」という声があがる社会

⑥相手に勝とうとして言葉を駆使するのではなく、真実を知ろうとして言葉を駆使する社会

⑦「思いやり」とか「優しさ」という美名のもとに相手を傷つけないように配慮して言葉をグイと呑み込む社会ではなく、言葉を尽くして相手と対立し、最終的には潔く責任を引き受ける社会

⑧対立を避けるのではなく、何よりも対立を大切にし、そこから新しい発展を求めてゆく社会

⑨他者を消し去るのではなく、他者の異質性を尊重する社会

中島氏は、そして、こうまとめます。

「あなたはこうした社会の実現を望まないであろうか。」

さて、あなたはどうか。

発しない社会です。街から聞こえてくるのは、誰に話しかけているのか分からない駅のアナウンスやデパートのアナウンスです。あるいは、街角に張られた標語やスローガンです。中島氏は、これらの無責任な言葉に怒りを覚えて「戦い」を挑みます。

（『うるさい日本の私』（1999新潮文庫）参照）

いじめの一方で盛んに唱えられる「思いやり」「優しさ」についても、中島氏は批判します。すべての人に気に入られ、満足されるような発言はあり得ないというのです。ある人が「思いやり」や「優しさ」を、発揮することが、他の人びとにとっては「暴力」になることさえあるのだといいます。

たとえば、列車内の親切なアナウンスが、眠っている人にとっての「暴力」になることもあるのです。「思いやり」や「優しさ」を語る人ほど、それに気がつかないというのです。中島氏の考えは明解です。「すべての人を傷つけないように語ることはいけません。いや、できるかもしれない。しかし、その時は真実を語ることが放棄しなければならない。」

こう考えて次のように決意します。

「人を傷つけないとして真実を語らないことではなく——場合によっては（とくに教室や研究室では）人を傷つけても真実を語ること、しかし責任を取ることを選んだのである。」

「優しさ」については次のように語ります。

「最新型の『優しさ』の特徴をなすものは、他者との対立や摩擦を徹底的に避けることであり、この目的を達成するために『言葉』を避ける。ひとことと言うと、自分に異質なものとしての他者を徹底的に恐れるのである。」

こうして育ってきた子どもたちが、どのようになっ
て行くか、およそ見当が付きません。実際、わたしが直接に接している若い人たちは、誰もが異様におとなしく、やさしいのです。そして、口数が少ないことは共通しています。〈対話〉ができないのです。

「〈対話〉とは、各個人が自分固有の実感・体験・信条・価値感にもとづいて何ごとかを語ることである。」

〈対話〉とは、会話ではありません。お互いがやり取りしながら、お互いの違いを知ることです。と